

戦後長野県内における観光関係新聞(一)

——『観光信州』『観光信州』『しなの観光民藝』

大 串 潤 児
(信州大学人文学部)

はじめに

本稿は、和田敦彦と筆者による「近代観光地・観光業についての基礎的史料収集」研究プロジェクトのなかで収集された史料の紹介を行う作業の一環である。研究プロジェクトの概要については信州大学人文学部内陸文化交流室編『平成14年度信州大学地域貢献特別支援事業費プロジェクト研究成果報告書 松本広域における連携型地域づくり』(信州大学人文学部内陸文化交流室、2003年)を参照していただければ幸いである。

今回は主として、戦後長野県において観光に関して発行されていたいくつかの新聞を紹介する。いずれも占領軍による検閲の対象となって収集・保存され、現在はアメリカ、メリーランド大学G.プランゲ文庫に所蔵されているものである。国内では国立国会図書館憲政資料室がマイクロフィルム版で所蔵しており、今回もそちらを利用している。

内陸文化研究の可能性について歴史学の立場からは笹本正治「歴史学からみた内陸文化研究」(『内陸文化研究』創刊号、2002年3月)が論点の整理を行っている。近現代史の立場からは、さらに「観光」といった論点を付け加えることが可能だろう。近年の歴史学においても「観光」についての関心は高まりつつあり、植民地をも視野にいれ、観光とそれにとまなう人々の他者認識の特徴を指摘する研究が進められつつある(中川成美「ツーリズムと国民国家」西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房、1999年など)。一方、1920年代モダニズムの展開をうけたファシズム期の社会相を、「観光」という視点から論じたものや(高岡裕之「観光・厚生・旅行」赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム』日本経済評論社、1993年)、ファシズム国家による身体管理の一環として国立公園問題を論じた研究もある(藤野豊『強制された健康』吉川弘文館、2000年)。1940年の「紀元二六〇〇年」問題も研究の大きな焦点になっている(古川隆久『皇紀・万博・オリンピック』中公新書、1998年)。総じて日本近現代史における観光についての議論は、近代国民国家形成期とファシズム期を中心としていたが、最近ではメディアイベントという視角からではあるが占領・復興期の観光問題にも光りが当てられつつあるといえよう(津金澤聰廣「朝日新聞社の『アメリカ博覧会』」、貴多野乃武次「観光振興とメディア」、いずれも津金澤聰廣編『戦後日本のメディア・イベント』世界思想社、2002年)。

こうした研究は直接「内陸文化」という視角からのものではないが、戦時戦後の社会変動のなかで「内陸地域」の特徴を表わす諸産業がどのような変化をとげ、また内陸地域固有の文化がどのように観光資源として「再発見」されるのか、といった問題を考える時、「内陸文化と観光業」といった視角で戦時戦後を通観してみることも意義があるといえよう。登山、スキー、温泉、ハイキングといった近代ツーリズムの代表的なものは、主に内陸・山岳県である長野県でこそ議論できるものであり、こうしたツーリズムの動向が戦時・戦後を経てどのように変化し、1960年代以降の本格

的な観光ブームに接続していくのか、単に長野県観光史に止まらない意義を有するといえよう。

同時に「観光資源」として「再発見」された文化財が、戦後戦後を通してどのように人々のなかでイメージされていったのかを明らかにすることも、地域の人々の歴史意識を考えるうえで重要な論点となろう。こうした論点は、青年団におけるハイキングや文化運動などより広い文脈でも議論できる問題だと思う。

本稿が紹介するものは、いずれも1947年発行の『観光信州』(一)、『観光信州』(二)、『しなの観光民藝』の3紙である。試みに県立長野図書館編『長野県公共図書館 新聞雑誌総合目録』(1996年4月1日現在、県立長野図書館、1998年)で3紙をひいてみると『観光信州』(一)のみが上田市立図書館所蔵となっている。ただし、No.691(1974年)以降のものであり、創刊当時のものはない。したがって、今回紹介する三紙は少なくとも県内公共図書館では所蔵されていないものである。発行地域は上田・長野市と東北信に片寄っているが、全県的な記事が主である。なお、中信地域には『信州観光タイムス』などがあり、こちらも収集済であるが今回は紙幅の関係で紹介できない。次回にまわしたいと思う。

(一) 『観光信州』

『観光信州』は、1947年9月1日に創刊されたと思われる旬刊の新聞である。発行所は上田市原町中区の「観光信州新聞社」、発行兼編集人は三井清一である。定価1部2円で年間購読料は、送料共100円である。プランゲ文庫には、創刊号、第2号(1947年9月11日)、第3号(1947年9月21日)、第4号(1947年10月1日)までが保存されている(国立国会図書館憲政資料室での請求番号はNK0448)。

発行部数など詳細はわからないことが多いが、「本紙は県内は勿論県外各地の主要な交通公社及び観光協会、温泉地旅館へひろく配賦致して居ります」(『観光信州』第3号)とあるので、相当部数が関係者に配布されたと思われる。

創刊号に掲載されている「発刊の辞」は創刊の趣旨を次ぎのように述べている。

敗戦二ヵ年目に、民間貿易の開始されました事は、再建日本の前途に一道の光明を与えられたもので、洵に御同憲に堪えない処です 茲に於て、先づ第一にせねばならぬことは、我国の観光設備の充実を期することで、しかも我国でも屈指の観光地と称せられた、本県にても設備を要する事は当然であつて、又急務と言わねばなりません。

政府は全国に更に、国立公園増進を計画中で、其内に本県に一ヶ所の候補地が挙げられて居る、此時に県下六市は勿論のこと、各町村に於ても観光協会設立の気運に向いつゝあるのであります。

吾々は、微力を顧みず、観光信州の為に本紙を発行いたしました。

(「発刊の辞」『観光信州』第1号、[1947年]9月1日)

創刊号の主要な記事は、民間貿易再開とあわせた長野県および県観光連盟の事業計画や三国山脈一帯の国立公園化促進運動の概要、県知事・林虎雄(「観光事業愚感」)、県会議長・長野市長・松橋久左衛門(「県観光連との提携を」)、県観光課長・倉科修平(「発刊を祝う」)、上田市長・井上柳梧(「観光県の建設に本紙の使命重し」)の祝辞、などである。

解説記事「貿易再開と共に観光事業愈活発」によれば、県の観光事業計画は①国際観光地、②国内観光地に分けて、県・県観光連盟の二本立てで進められつつある。当面の事業としては、「貿易視察団の観光招致に備えて」、軽井沢―上田、上田―長野、長野―志賀高原・野尻、長野―大町、松本―諏訪・富士見、松本―上高地、上田―松本の七路線修理に着手すると同時に、より大きな構想として三国奥秩父国立公園指定促進運動や、野尻湖・美ヶ原・ハヶ岳・御獄山・天龍峡・恵那山を県立公園とする計画を進めている。その他、各地域の動向としては、松本の日本アルプス観光連盟による登山コースの整備、上田市による菅平・別所の開発、長野観光協会による善光寺・戸隠・野尻湖の開発、平穏村観光協会・上山田村戸倉町・野澤温泉観光協会は温泉地、諏訪市は湖、軽井沢観光協会は浅間・草津、北安観光協会は日本アルプス・上高地、飯田市観光協会は飯田地方、信濃尻村は野尻湖の県立公園と戸隠・小谷温泉の開発、松代高原観光協会は地蔵峠の観光開発に乗出していると記録されている（『観光信州』第1号）。

三国山脈一帯の国立公園指定促進運動については次ぎのように報道されている。

昭和十七年度に信越群の三県に亘る三国山脈を国立公園の指定候補地として政府に進言したが、時恰かも戦争中のため中止となった（。）終戦既に二年、貿易は再開され外来客は日本を訪れんとし、全国各地に観光施設起らんとする時に当り、本県及び群馬、新潟の三県では三国山脈の国立公園指定の促進運動を起し（中略）事務所を群馬県庁に置いた

（「三国山脈一帯を国立公園に指定」『観光信州』第1号）

長野県からは「本県の玄関口となる」上田市をはじめ軽井沢町などから期成同盟発起人が出て、9月3日の三県連絡協議会には軽井沢町長、上田市長はじめ平穏村長、長野電鉄常務、県乗合自動車事業組合専務が参加した（同）。

第2号は「県立公園候補地 戸隠山＝野尻湖」や別所温泉の紹介記事、三国山脈国立公園指定促進運動の動向（指定地域の概況や指定促進ポスター展の告知など）、元北牧小学校長・郷土研究家小林尚二の「松原湖と松原」などが主要な記事である。また、「伝説」や「民謡」の紹介記事も掲載されるようになる。

その他、上田観光協会の発足（1947年8月27日）、「県下旅行斡旋業者」による信濃観光旅行連盟会の結成、「信州とスキー」「飯田市より」（藤井紫苑生）といった時事に関するものがある。

信濃観光旅行連盟会（見出しは「信濃観光旅行会連盟」とある）の趣意書は次ぎの通りである。

拙者等永年旅行斡旋業者として、観光事業発展に微力を竭くし来る候所現下観光事業の転換期に臨み、業者大同団結致し信濃観光旅行連盟を結成し各機関とも連絡を密にし益々観光事業の爲め奮闘致す所存に候、中略顧れば吾等は明治年間以来四十年の星霜を観光事業に従事し各都市観光地、温泉地、山岳等の開発宣伝は勿論鉄道事業不振の際は多大の犠牲を払い、旅客誘致宣伝に全力をつくし其事業の成績も相当認められ、昭和十七年八月三十一日に旅行斡旋業者として公表せられ、以来引続き事業に専念致し居り候処日支事変突発は鉄道輸送に最大掣肘を受け昭和十八年十二月新潟鉄道局より詳細の説明により戦争終了迄一時事業の中止を申出て今日に及び候終戦後工事各地にはうはいとして観光事業の勃興を見るに至り此際再起の上大に活動致し観光事業の

為に寄与致す可く今般信濃^マ観光^マ旅行連盟を結成したる次第に有之候

(「信濃観光旅行会連盟の結成」『観光信州』第2号、1947年9月11日)

8月に発足した上田観光協会は上田駅前案内標の設置、パンフレット発行、菅平貯水池設置、競馬場誘致などを協議、規約を決め、役員には上田商工会議所会頭・上田市助役・上丸電鉄会社代表者が就任、評議員には別所・青木・長村の各村長や田沢・沓掛・新鹿澤などの温泉旅館組合長、菅平スキークラブや上田映画劇場といった観光関係者をはじめ上田市長、上田駅長、警察署長、上田繊維専門学校長などが加わった(『観光信州』第2号)。

また、「観光事業と開墾」と題する高原開発計画についての記事もっている。長野県の高原は、「食糧増産と、引揚者や戦災者入植のため続々開墾されている」ので、「県観光課では開墾と観光事業の調和を計るため、主たる高原観光開発計画をたてることになった」という。内容は「まず観光事業に必要な区域を定め、道路、ホテル、別荘、キャンプ地、ゴルフ場等の体育施設その他高原の物資により各種の施設計画を行なうもの」で、菅平、野辺山、霧ヶ峰、志賀高原などから着手するとされている(「観光事業と開墾」『観光信州』第2号)。

第3号には、「県立公園候補地 ハツ岳連峯」の紹介記事、「浮世絵研究家画家」である「ポール・ジャクレー氏」による「国際観光地」、「軽井沢を語る」記事、秋のハイキングコースの紹介などが掲載されている。また、エッセイとして元長野県観光主事・現長野県地方課員下平廣恵(「美しいゆめ……。それは観光の……」)、日本画家・北佐久郡小諸に疎開中の伊東深水(「信州の美観」)、「農本クラブ代表」という梶原携(「観光と口碑伝説」)などの文章が載っている。

梶原の文章は善光寺縁起や姥捨山の話しなどではなくて「もつと違つた素朴な田舎の伝説」に注目して、「観光新聞などでこうした話を旅行者のつれづれを慰めるために取り上げて」みるという提案である。具体的には「小県七不思議」といわれる「上田城の真田石」「瀧の宮の片目魚」「山口の一つ火」「虚空蔵山のナンジャモンジャの木」「沓掛の石芋」「塔の原の弘法石」「鴻の巣山」であり、さらに信濃国分寺や真田昌幸、村上義清の話などが指摘されている(『観光信州』第3号)。

第4号には、「秋のハイキングコース」(菅平～傍陽～松代～上田)、「婦人によき田沢温泉」「長野市と観光」といった紹介記事や、神津港人(「ありの儘の美しさ それが観光美」)、信濃毎日新聞上田支局長・井澤潤治(「郷土の性格」)のエッセイなどが掲載されている。

1947年8月15日から再開された民間貿易にあわせて、長野県では「取敢ず庁内各部課の有機的連絡を保たしめるため、知事を会長として貿易代表団招致対策連絡会を設置した(「貿易代表団の招致対策」『観光信州』第4号)。倉科修平観光課長が上京し、貿易庁を訪問して代表団招致を申請した。倉科は「かつて原子爆弾によつて廃墟と化した広島市が既に復興から観光にこぎつけ、目下来朝中の貿易代表団を招致しようという書面が着いているのを見て、その観光に対する熱意には全く敬服した」と述べている(「地的好条件をフルに用いよ」『観光信州』第4号)。長野県では、「来朝中の貿易使節団に県下の軽輸出品を展示するため県営貿易館を長野市大門町元丸為呉服店に設置した(「絢爛たる県営貿易館 特産品百余点展示」『観光信州』第4号)。

確認できる3本の社説は、「感謝の念」(第2号)、「時論 貿易代表の入信を前にして」(第3号)、「旅館の待遇改善と女中教育の要」(第4号)である。「観光事業は其施設の充実と宣伝に努むると共に観光客^マに対しては出来得る限りのサービスをせねばならぬが、殊に欠けていると思はれるのは、

サービスであると思われる」と指摘したもの(「感謝の念」)、「只茲に遺憾とするものは旅館の設備の不完全であるのと共に待遇について欠けて居る点」として「旅館の女中の教育は、今後業者にとって最も大きな問題で、観光は施設の充実も勿論必要であるが、女中の教育訓練も又必要である」との指摘など(「旅館の待遇改善と女中教育の要」)、サービスの質についての議論が多い。「国際都市軽井沢と共に既に観光地として外国人に知られて居る本県は観光地としては豊富な条件に恵まれているのであるが、この条件も物質的表面的にのみ走つて精神的の面を忘れては観光事業に成功しない」、「貿易再開と相俟つて実に国際観光事業再開への試金石である、よく関係官民一致して慎重なる企画に基いて万全の接遇を期待する」(「貿易代表の入信を前にして」)という文脈が強調されていた。

(二) 『観光信州』

(一)で紹介したものと同名の新聞。タイトルバックの図柄も同一なので、何らかの関係があると思われるが、現在のところ確認できてはいない。第1号は1947年9月1日付なので、(一)の『観光信州』と同一日付。ただし発行所は上田市海野町、「観光信州新聞社」。社名も同一だが、所在地と電話番号、また印刷所も異なっている。編集兼発行人は石山一。

プランゲ文庫には、第1号(1947年9月1日)、第3号(1947年10月5日)、第4号(1947年10月20日)、第5・6合併号(1947年11月20日)が保存されている(国立国会図書館憲政資料室での請求記号はNK0449)。第2号が未確認のため詳細はわからないが第3号からの記載によれば観光信州新聞社は本社を長野市元善町に、支社を上田市田町においている。定価は1部4円と、(一)の『観光信州』よりは若干高価であり、年間購読料は送料共96円である。

第1号掲載の「趣意書」は次ぎのとおりである。

残暑之候ます〜御健勝の程をおよろこび申しあげます。国民の期待をかけた貿易が再開されいよ〜平和日本のたてなほしがひへいた経済からはじめられました。文化国家としては貿易の振興にともない観光事業の発展をはかつて知られざる日本を知らしめ識つてもらふよい機関として混沌とした出版情況のなかから本紙がこゝの声を上げました事は一重に観光に熱意をもたれる皆様の絶大なご支援を仰ぎましたことを紙面を通じて厚くお礼申し上げます

従来観光といへば、風景案内と営利のみを目的とした客引的宣伝に終始してゐる観がありました。が、小社は郷土愛に出発して直接生活と結びついた近代感覚により真に観光信州の名に価ひする、観光文化紙としてまた旅する信濃路の案内役としてこの使命の実現を期したいと思ひます。

(後略)

(「趣意書」『観光信州』第1号、1947年9月1日)

この号には林虎雄長野県知事が「観光と国民感情」という論説を寄せている。(一)の『観光信州』にも林はことばを寄せているが(「観光事業愚感」)、こちらは「この度県観光連盟を代表する、観光信州新聞が発刊されましたことは一般の観光に対する啓蒙と、その輿論機関として、ここに創刊を祝」という立場からのものである(『観光信州』第1号)。林はこの論説「観光と国民感情」のなかで「敗戦日本の再建はなんといつても再開された貿易にその多くを期待されてゐます(中略)今や貿易と観光立国策は国民の常識となつてゐます」と述べている。続けて県観光連盟発足に言及し、

「観光事業計画の一部として大きく浮び上つてゐる問題は内外の接触によつて昂まる地方文化を新しくきづいてゆくために、国際観光地の実現化が最も希求されてゐます」とする。林の議論の前提には、「新しく生れ変つた日本が永遠の平和国家であらうことを保証するのは単なる憲法ではなく、私たち自身の日頃のおこなひであり、いとなみにある」という認識があり、そうした観点から次ぎのような主張が導かれた。

歴史的に見ても平和愛好の日本国民が一つの誤解のために苦しんできた過去は、あまりにあり／＼としてにがすぎるものがあります。今更ら私たちはその誤解をくどくどしく弁明する必要はないと思います。話せばわかるといいますが、私たちの誠実な日常生活を正しく観てもらへばなにより確かなことだと思ひます。

観光事業が促進されて観光客の往来が頻繁になればいつかはこういふ誤られた考へも一掃されて、明るい理解をもつた人々の一員に加へられる日もさき遠くはないでせう。

（「観光と国民感情」『観光信州』第1号）

第1号の主要記事はここでも三国山脈国立公園指定促進運動である。県の観光事業計画については、①国際観光地開発の計画をたてること、②自動車道路必要線を選定しその実現を期すること、③国際観光ホテル誘致運動、④ハイキング登山スキーコースの整備計画、⑤宣伝資料の整備、⑥公民館設置に際し観光対象としての価値を増すよう努力する、⑦観光事業従事者の現勢調査、⑧観光事業の指導・趣旨の徹底、⑨会員相互の情報交換、⑩会員企画の事業展開に協力、といった10項目が紹介されている（「県の観光事業計画」『観光信州』第1号）。

また「机上構想」ではあるが都市計画構想が紹介され、「観光都市整備計画案で観光地を設定して、それに通ずる道路、ホテル、娯楽設備の補修拡張に主力をそゝいでいかうとする」ものと評価されている。具体的には「南信地区においては北アルプスを中心に松本、諏訪、北信では、草津温泉をひかえてゐる浅間山麓の軽井沢が現在は観光地として内定されてゐるが、その他にまだ三ツ四ツ候補地を上げてその選定に調査をすゝめてゐる」という（「遠大な構想 観光都市計画案成る」『観光信州』第1号）。その他、作家・長崎謙二郎の随筆（「信州の魅力」）、「旅行好きなアメリカ人」「国際親善を計る！オランダ少年の観光サービス」「上松バス同乗印象記 上田—松本間三時間とどぶ」などの記事、さらに観光夏季大学、日本観光音楽連盟結成や観光写真コンクール展などの観光関係の時事的な記事や「投書欄」「観光教室」などの啓蒙的な記事も掲載されている。長崎は以後もエッセイを寄稿し続けている（「信州の路」第3号、「深みゆく信濃路の秋」第4号）

第3号で注目すべき記事は、三国山脈国立公園化促進運動の動向、「計画停電に悲鳴上げる 上山田、戸倉温泉」、「上高地百尺の湖底に沈む ダム建設計画案成る」といったところだろうか。

上高地ダム建設については記事によると、第1期として梓川上流をせきとめて島々谷に20万キロ発電所を2ヶ所建設、第2期として高瀬川上流水を利用して上高地貯水池水量の増加を図り、さらに黒部川上流をトンネルで引水する第3期工事が計画されていた。「観光地の上高地を百尺の水底に沈める水力発電工事の計画は、地元はもちろん全国的に大きなセンセーションを巻き起し、観光関係方面からは『上高地の自然美を破壊する』と早くも反対の機運が強かつた」という（『観光信州』第3号）。また日本画家・竹原嘯風「蕎麦の味」などのエッセイもある。

さらに第3号には、「観光施設の充実とサービスの問題を語る座談会」が掲載されている。出席者は県観光課長・倉科修平、同主事・岸田道時、犀北館主・近山與一郎、清水屋旅館主・清水勝太郎、管理部旅客係長・米山正夫、元観光協会主事・下平廣恵である。ここでは多くのことが議論されているが、興味深いものを取りあげてみる。

第一に旅客の動向。「最近の旅客状況は」という質問に対して、米山管理部旅客係長は「数字的には戦前とほゞ変らぬ位」であるが、「闇屋といふものを嚴重に取締れば今でもゆうに楽な旅が出来ますが、なかなかさう簡単にいかないんですね」と答えている。犀北館・近山の「しかしこれでも汽車が混むといふので、でしぶつている人が多いでせうね」という発言に、米山は続けて「去年にくらべて今年はそれでも増加しています、来春からは相当活発になるんじゃないかと思ひます」との見通しを述べている。

第二に「観光地としてとるべき態度」の問題。清水屋・清水が、「関東関西の華かなものをまねても駄目だと思います、やはり百姓のため勤労者のために健全性をもつた保養地として出発するのが至当だと思います」と述べたのに対して、元長野県観光協会主事・下平は「しかしまあ健全性のある保養地としてもいくらかの娯楽機関が享楽設備は必要ぢやないかと思ひます」と続けている。近山は、「信州の場合もそれは必要だと思います」と下平の意見を受けたくらうで「あまり猥なものではなくダートサイドのないきれいなものであつてほしい」と述べ、県観光課長・倉科は「国は敗れた、生活は墮落したといふ自暴自棄的氣持をもつている今どきは猶更さうあつてほしい」と発言している。

その他、「道路修理などははじめつから県まかせでなく公共団体などが奉仕的にさういふ仕事をやつてもいい」（倉科）といった発言や、鉄道サービスに関して「緑化運動とか車内を明るくする運動、その他に文化運動を起しています」といった発言（米山）。「教育と教養では今のような交通地獄ではどう批判していいかわかりませんがせつかく一列を励行していたかと思ふと途中から待ちきれなくなつて大学の帽子をかぶつた学生が行列を乱して窓から飛び乗るといふ有様でその教養を疑がはれますが、同情すればやむをえないともいへます」（米山）と「それ相当に観光と結びつた社会教育と人格の陶冶に専心して行けるようになりたいもの」（倉科）との応答もある（『観光信州』第3号）。

第4号には「渋温泉女子労組問題でひともんちやく」「信州観光写真協会設立を急ぐ」「雑記帳紅葉の志賀高原」紹介記事、「女流作家」・田村さえの随筆（「冬じたく」）、文化欄には和田矩衛による「観光信州とレクリエーション運動」などの記事が載った。また、「観光展望台」として各国の観光事情を紹介し、「観光時評」として観光に関する社会問題を扱っている。第4号のものは「労働基準法」である。

1947年9月中頃、渋温泉で女中の労働運動がおこり、「女子従業員の待遇向上のため同志に呼びかけて四十名内外の同意を得て、雇主にせまつたが」、一時立ち消えとなっていた。10月4日、リーダーが運動を理由に解雇されたことをきっかけに、「憤慨して不当首切りだと県労委に提訴」、その結果「労働基準法十一條違反として首切りを取消し従組の結成を認め、それまでの闘争経費は一切経営者が負担することにしてまるくおさまつた」という。記事によれば、「松本市外浅間温泉の女中労組結成の運動が下高井郡平穏村渋温泉に波及」したとのことである（『観光信州』第4号）。「観光時評」はこれをうけて「労働基準法はたかいびき」を掲載する。この論説は、「いままでの女

中がつかはれているのんびんだらりの勤務時間は不合理そのものであり（中略）さうしたなかにあつて女中のプライド謂はゆる彼女等の人格の尊重を要求する声が大きく浮び上つてきた」と状況を認識しているが、「一面女中労働組織のようなものは余り感心出来ないようである。女中はなにしろ気苦勞な仕事であるだけに雇主のこまかい温い情愛をもつてつかつていくことは一つ釜の飯をくつている人同志の当然いただくべき感情であると思ふ。基準法はあつても思いやりははるかにそれを越えて奉仕するものをもつてゐるのではないか」と論じている。こうした議論の前提には、「今まで女中は虐^アだけられその人格は無視されていたようにいはれているがさうとばかりはいへない」、「嫁入り前のしつけのつもりでできているといふ考へ」、「完全な職業でないといふことがいへるのはをんなである故にでもある」といった認識がある。

和田矩衛「観光信州とレクリエーション運動」は、『観光信州』紙上では異色のものである。民間貿易再開、国際観光客の招致といったムードのなかで「ドルのお客が流れ込むということだが、それがいかにはかない夢であるか」と批判的であり、観光事業についての誤った考え方として①「観光事業を風景と旅館に限る（中略）産む力或わ産んだ力—文化と経済—をないがしらしにしていること」、②「外人向と邦人向の区別が余りにはつきりしすぎていること」、③「遊覧といふことがすべてで、レクリエーションという考えがよくふくまれていない」ことを指摘している。さらに和田は次ぎのようにいう。

遊ぶということわ、本来健康なものだと思ふ。それわ平常の生活の重なりに変化を與え、再生をもたらしからである。それわ生の本来の活力を太陽の下にいきへとさらすことである。しかるに私達の感じでわ、遊びというところか暗く、消費的な、個人的なものがつきまとうのを免かれない。そしてその様な性格がそのままいゆる観光地に持ち込まれ、公德心と欠乏と相まつて、自分さえほしいままにふるまえば、あとは野となれ山となれとなる。その上いはゆる観光事業者もそれにこびへつらうのである。

（中略）

それわこの頃すこしずつ形をなしてきているレクリエーション運動を、ひとつの権威ある機関（当分日本わこれがないとどうもならぬらしい）によつてとりあげ、或ひとつの地方をこの機関の支配下に置き、そこには国庫の相当の資金をかけて、過去の日本の誤まつた考え方や感じ方を一掃するのである。そしてそこを生活の重いくびきを離れた真に明るく、健康な、誰がいつてもびへと、しかも費用もすくなく生きるということをしきへとたのしむ場所とすることである。

（和田矩衛「観光信州とレクリエーション運動」『観光信州』第4号）

和田は、その特定の地域として「信州を最もふさわしいものと信じている」と述べているが、レクリエーション運動と観光信州といった観点からの議論はこれ一編にすぎない。

第5・6合併号では「三國山脈国立公園促進期成同盟会発足」、「上林スキー場建設計画進む」をはじめとする志賀高原、美ヶ原などのスキー関連の記事、「観光上田に競馬場が実現」、「本県蚕糸業の現状と観光事業」、天龍峡観光協会発足と「天龍峡百年祭」などの記事が注目される。上林スキー場については後述の『しなの観光民藝』もとりあげているが「本コース完了後総合競技場として如何なる大規模の大会をも招致し得るものとして一般に期待されて居る」（『観光信州』第5・6

合併号）とあり、『しなの観光民藝』が明確に国際オリンピック招致を明言しているのとは少しトーンがさがる。

木藤岩雄「本県蚕糸業の現状と観光事業」は残念ながら続きがあり、プランゲ文庫所蔵のものでは追うことができない。ここでの木藤の問題意識は、「海外貿易もしくは、外貨獲得の為めの国際収入の途が計画的に然も多角的に行はれなければならない」という点にあり、そのためには「蚕糸業復興五ヶ年計画」とあわせて「貿易外の国際収入としての面」から「本県に於ける国際観光のための総合的観光地開発計画の樹立実行を提唱するもの」であった（『観光信州』第5・6合併号）。具体的な内容が判然としないのは残念だが、蚕糸業と国際観光の二本立てによる国際収入増加という経済構想の大枠は理解できよう。蚕糸業と国際観光業が長野県産業復興の2つの柱として提起されている。

『観光信州』で興味深いのは連載記事「温泉郷ルポルタージュ」である。「温泉郷ルポルタージュ」は第1号（「上山田・戸倉温泉の巻」）、第3号（「平穏温泉の巻」）、第4号（「西内村温泉の巻」）と連載されている。温泉地をめぐる戦後直後の社会相がうかがえて興味ある記事となっている。

上山田・戸倉温泉の様子は次ぎのように記述されている。

運賃、宿代の三倍値上と食糧事情の窮迫したきよび旅する人の足も一時は遠のいた観があつたが、よりそふ都通いの闇屋連中にこゝ再び上り下の列車はすし詰め盛況を呈してゐる。

夕方スーツケースとリュックを手に肩に幾組かの旅人がこの湯町をおとづれるといふのはこの街の人の話である。

（中略）

享楽の巷につきものの強盗「ユスリチンピラ」の横行するぶつさうなこの町に湯の香をしたつてくる人が駅の調べによると平均して一日二千人はゐるといふ、それで「かいびやく以来の閑散だとは」想像するだけでもこの街の人気のたいしたものであつたことがわかる。

（『観光信州』第1号）

また、競馬場設置問題や観光協会の活動などが紹介されている。競馬場設置問題は、「望み薄」とされているが、「室内競技として娯楽の乏しい温泉旅館でピンポンの盛んなことはその野外娯楽場のないことを物語つてゐる」状況のなかで、野外運動場が整備されつつある点に「国内観光保養地」としての期待がかけられている。「それは希望と抱負をもつ多くの村の青年達の手によつて建設されつつある」とされ、「千曲川の釣、冠着山のハイキングコース、国道をつなぐ舗装されたドライブウェイ、広いグラウンド等がすでに八方美人の気質と人気をもてはやされるいゝ条件を揃えてゐる」と述べてある（同）。

「平穏温泉の巻」では、平穏地域の「湯田中、渋、安代温泉こそは国民保養地として屈指の中に入れられるべき地であろう」と記されている。しかし、「志賀の山を中心に人工的な色々の施設をほどこし、開発をすればもつと健康性をおびる、いい温泉場として発展する可能性は充分にある」にもかかわらず、平穏村観光協会は「資材難と資金の悩みがさきたつてくるので歩みみの状態で時期をまつている」状態である（『観光信州』第3号）。

「西内村温泉の巻」では、霊泉寺温泉・大塩温泉・鹿教湯温泉を訪い次ぎのように記している。

小県六湯めぐりは楽しいコースであるがその不便は甚だしい。南には西内村霊泉寺大塩鹿教湯等の温泉があり。西には青木村の杳掛、田澤の温泉その真中に別所がある。どこからどういふコースをとつても気楽にすぐでかけられるところはない、のりかへ〜やつとつくまでは一日がかりで、小県温泉郷を結ぶ便がないかぎり大きな発展性は望めない。

(『観光信州』第4号)

鹿教湯へは「丸子からこゞまで自動車に通じている」ので賑わっている。しかし、この温泉は「秋の収穫が終ると味噌から米からいろ〜な食物をしょつてお百姓が長い湯治にくるので、旅館はたえず満員であらかじめ予約しておかないとにならない位ださうである」と指摘されている(『観光信州』第4号)。ただし、「今計画中である松本行のバスがここの麓をとふるようになると、ます〜客も展らけて行くだろう」が、「こうした山間はなるだけ人工を施さないで自然のまゝにしておきたいといふ意見が多い」という(同)。

『観光信州』には「社説」はほぼ掲載されていない。第5・6合併号に一つだけ「地方文化建設と観光事業」として掲載されている。

これは、日本は「敗戦によつて朝鮮、満州その他の植民地を失い、こゝに限られた産業施設しか持つことを許されなくなつた、そして戦禍に多くの都市は破壊され、その復興にはまつたく前途瞭遠なものがある。幸なことに本県はその災難をまぬがれ、今こゝに戦前にひつてきする蚕糸業の復興を見ながら、幾多の部門の軽工業が発展しつゝある」との認識から筆を起こしている。さらに「我々はこの残された天恵の資源を十二分に活用して、観光事業発展と地方文化の向上を築き上げていかなければならない。国家財政の大部分を外客誘致とその落していつた外貨によつて賄ふスイスのやうに、商業品としては世界市場に肩を並べるものをつくりえない貧困な現状と見返り物資として数へ上げられるものは生糸以外にない」と続けている。

観光業については「この際声を大にしてその明びな風光の魅力と東洋的情緒にあこがれる、外国の観光客に対して双手を上げてこれを歓迎し、野も国もこぞつて観光宣伝をやり、その貿易外収入によつて疲弊した国家の再建を計り、県の健全な財政を樹立せねばならないときである」、「また一面過去の戦争によつて好戦国民として世界人の侮蔑と反感を買はれている我が国民が世界の平和国家として、今後民主主義の中に加はつて行く上においても国際間の親善と理解を深め、文化の交流を計る上にこの観光程重要なことはいふまでもない」と主張している(「社説 地方文化建設と観光事業」『観光信州』第5・6合併号)。蚕糸業と観光業の振興が国家的意義をもつと同時に、地方文化建設という観点からも論じられているという特徴がある。さらに観光事業は単なる経済的な問題ではなく、「平和国家」として再生する日本の象徴的な存在でもあることが主張されているといえよう。

(三) 『しなの観光民藝』

『しなの観光民藝』は、(一)で紹介した『観光信州』編集発行人である三井清一を編集発行人とする新聞である。「信濃観光民藝新聞社」は上田市原町中区の住所となっているので、『観光信州』発

行所と同一である。印刷所も同じであるので、『観光信州』の後継紙であるといえよう。プランゲ文庫には第5号（1947年10月11日）、第6号（1947年10月21日）、第7・8合併号（1947年11月11日）、第9号（1947年11月21日）、第10・11合併号（1947年12月21日）が保存されている（国立国会図書館憲政資料室の請求記号はN S 1554）。『観光信州』のナンバーが第4号（1947年10月1日）で終わっていること、『しなの観光民藝』が「旬刊一ノ日発行」をうたっていることなどを考えてみれば、『しなの観光民藝』は『観光信州』の号数をも引き継いだことになる。定価は1部2円、年間購読料送料とも100円（一ヶ月ならば送料とも8円）という値段も同一である。第5号の「社告」には、「弊社はこゝに一大飛躍発展の為に民藝面をもとり入れ機能の拡大強化をはかる事となり信濃観光民藝新聞と銘打つて再スタートする事となりました」とある。

第5号の記事は、それまでの観光関係の時事にくわえ「魅力タップリの生糸 有望な上田の民藝品」「飛躍する工藝美術 進駐軍愛好の軽井沢刻」など民藝・工芸関係の記事が目立ってくる。県立公園候補地や観光地の紹介などは『観光信州』でも取上げられていた記事。「高原美ヶ原」（第5号、第6号）、「観光の小諸」（第9号、第10・11合併号）などである。また、村田直治「槍ヶ岳の神秘を聞く 其開祖播隆上人」（第5号、第6号）といった記事もある。

第5号で注目すべき記事は、上田市に関するものである。上田市では、「講和条約締結と共に欧米より我国に來朝者多きは予想される処で従つて観光施設と共に見返りとなる民藝品も必要に迫られている」という。「有望であつて前途あるものと視られている」上田の民藝は、「上田民藝舎のモデルシツプ」（「高価ではあるが輸出向」）、水野玩具工場（「戦前は輸出玩具として年額は一時莫大の額にのぼつていた」）、上田明照会の「輸出フランス刺繍のテーブルかけ」「しぼり染」などが指摘されている（第5号）。

また、上田市松緑会カントリー倶楽部（会長・浅井敬吾）による「国際観光都市大上田建設」に関する趣旨文（抜粋）が掲載されている。上田市は、「終戦以来、市の復興発展策について慎重研究中であつたが、この度同市周辺の日本アルプス、志賀高原、菅平スキー場、別所、戸倉、上山田温泉等の豊富な観光資源を利用して、これを国の内外に宣伝し、国際観光都市として、内外の観光客をこの地に吸収する事が、同市発展の途でありひいては外貨の吸収と文化日本の建設に寄與する最善の方策であるとの結論に到達した」という。松緑会は、この上田市の観光計画を「背負つて立っている」団体でもあるとされている。趣旨文の一節は次ぎのようである。

対外政治経済政策のみ能く日本を救わんとする時、茲に生を我が信州に享くる者の第一の誇りとする処は、明日の日本建設途上に對外貿易の大黒柱を担うべき蚕糸王国たる点である、これ賠償上第一の對象産業であると共に外貨獲得、見返り品給源の王座とも云うべきものである、吾人の第二の誇は教育文化王国たる点である、最後に併も将来性ある吾人最大の誇は観光日本が当然占むべき地位である（。）特に上田を中心としてその周辺に眼を転ずれば、外人をして「ワンダフル・シーン」の言葉を連発せしむるに足る景勝の地数うるに違なく、先ず東を指させば指呼の間に日本一の避暑地軽井沢あり、お花畑を縫うて姍々草津に走る高原鉄道あり、真夏を避ける遊客に取りて人生夢の行楽地と云うも亦過言であるまい、今尚本土唯一の活火山たる浅間山は東信の山野に君臨して将来のシネマロケーションの舞台や背景として世界にデビューするは火を見るよりも明らかである。（後略）

（「夢物語もやがて実現？ 世界にデビューする上田市」『しなの観光民藝』第5号）

この後さらに牧場、上田・草津間ドライブウェイ、菅平スキー場、温泉の紹介が続き、「更に上田周辺は有名なる更科ソバの豊穰なる原産地であると共にグリーンフィールドとして果樹園の馥郁たる香りを放つて俄然フルーツ界の明星としてデビューしオランダ、ベルギー、スイス、オデッサ、キエフ等の平和郷を想像せしむるに十分」と結ばれている（同）。

工芸については、戦前以来「軽井沢来往の外国人間に非常な人気を拍し日本を代表する工芸美術品として遠く海を渡つて輸出されていた」軽井沢刻が紹介されている。戦時期には生産が途絶えていたが、「今夏〔-1947年〕軽井沢町大坂屋の土屋氏に依つて復興され進駐軍家族の異様な人気を呼んで居た」という。

記事は「私は先ず美しいものを意識出来る眼を養生しなくてはならぬそれが直ちに国民生活文化の昂揚に通ずるみちであると同時に真の平和日本が世界に認められて、国と人とが国際人としての水準に達し得る唯一のみちである」と述べている（「飛躍する工芸美術」『しなの観光民藝』第5号）。第6号掲載の「時論 日本工芸の再建」は、軍需から民需への転換をうけ「最近工芸品の生産販売の企業が活発であるが」、「概して低劣品が多く到底日本工芸の真価を紹介するに足らざる」ものを慨嘆したものである。「徒らに華やかな工芸復興を無条件でうのみ」にすることは出来ず、それは「戦時中もそうであつた様に——余りにも安価に便乗する傾向、これが戦後非常に勢いで工芸品の生産と販売の方面に現われつゝあるからである」としている。「永い年期を入れた職人の而も仕事に対する丹念さ愛情情熱が無意識の間に作用して藝術としての工芸品が生れるのである」というのが「時論」の立場でもある。

第6号には全観連事務局長・武部英治「観光事業展望」、日本馬匹協会理事・佐藤繁信「国際競馬に就て」といった論説のほか、県内五つの仏像が「重要美術品」に指定された記事、「運輸機関の復興を」と提言するアメリカン・プレジデント汽船会社社長・「ジョージ・キリオン」の談話、県立公園候補地紹介といった記事が掲載されている。小松尚二の記事「松原湖と松原」も『観光信州』以来の連載記事である（一・『観光信州』創刊号、二・『観光信州』第3号、三・『観光信州』第4号、四・『しなの観光民藝』第6号）。

武部の論説は、観光事業の前提として衛生状態の改善を説き、さらに接客態度にまでおよぶものである。武部は、「お互い戦争には負けたけれども人間としては平等である、是はアメリカの思想でもある（。）その思想を我々は受入れるように、憲法も改正になつた、我々はお互に人間でありますから、その誇は絶対に捨てゝはいけない」とし、「日本は仮令武装は解除しても、文化国家として再び一等国の列に列し得ると私は考えて居る」と述べている。

第7・8合併号には5号での上田市観光事業計画をうけて中御門経恭（侯爵）の「観光都市上田の感想」が掲載されている。中御門は、「一にもアメリカ二こともアメリカばかりでなく、もつと広く大きくやつて頂きたい」、「養蚕はもうアメリカばかりでなくて中華民国にも出来ますので、是からは中国との取引が非常に多いことになる」との立場から、「今のところでは矢張り中国が一番良いお客様であろう」と主張する。「今日アメリカの連中は何処へでも行つて遊ぶことが出来ますが、中国の人は中国人だけが楽しめるような場所もないから、上田市が率先してさういふようなものをお作りになり、さうして将来の貿易というものに対して、是と率先して手を握つて」いくことを提

起し、それは「将来上田市が中国に発展致し、中国に貿易して行くということに対しての大きな役割を示すもの」であると提言している。

第9号は、シーズンをひかえての「スキヤーの受入準備進む」の記事を一面に、「観光の小諸」「有名温泉場紹介 弘法大師と沓掛温泉」などの紹介記事、赤羽ひろみの随想「落葉と時雨と霧 美ヶ原の景色に就て」、停電の温泉街への影響などの記事が見える。松本山岳会では「今冬の事業計画の主目標をスキーに置き」、乗鞍岳でのスキー講習会、美ヶ原一霧ヶ峰—中山—美ヶ原の「サンデースキー」や、菅平・八方尾根スキーツアーが計画されているという（「スキーを主目標に 松本山岳会の事業計画」『しなの観光民藝』第9号）。

第10・11合併号は「東洋一を誇る国際スキー場上林に開設」、長野県スケート連盟のスケジュール計画、「スキー場初便り」「大雪中の温泉場廻り」（中野夢影）など、ウィンタースポーツ関係の記事がほとんどである。

そのなかで注目すべきは、上林スキー場建設についての記事である。「本スキー場は上林温泉より、志賀高原旭山を結ぶ全長五料に及ぶ北斜面のコースにして雪質に変化なく、就中中部山岳国立公園及信濃五岳を一望の内におさめ眺望絶佳なるコース」であり、各種のウィンタースポーツ総合施設を備え、「国際オリンピック招致計画を前提としての設備を完備すべく」事業完成を目指している。平穏村各種団体の協力はもとより、「安藤平スキー場に建設中のロープ塔は全長三〇〇米にして、米八軍の手により十二月二十日迄に完成すべく」工事が進められている。アメリカ第八軍士官「レヨナード大尉」は、1947年7月上林施設隊長として赴任したアメリカのスキー選手だが、「本スキー場が地元村民の協力により近く完成されるであろうが、日ならずして必らずや国際スキー場として各国に紹介される日は遠くはあるまい」と述べている。

また「スキー場初便り」は、この時期のスキーをめぐる社会相がうかがえて興味深い。志賀高原は「温泉郷を手近にひかえて有望な民衆スキー場」とされているが、宿屋の収容力も大きく平均1泊150円、信越国境（関・赤倉・池の平・妙高）では1泊150～180円で「一切を賄つてくれ、主な宿舎には一日五十円位で貸しスキーも準備されている」。野沢温泉では、貸スキー1日30～50円、宿泊料は1泊一切で120～150円、と記録されている。『しなの観光民藝』の評価は、「宿舎はどこも完備す だが勤労階級の懐は痛い」というものであった。

『しなの観光民藝』を通覧してみると、国際観光への関心が高く、外国人の論説や談話が多く掲載されている。「いそげ！運輸機関の復興を」（ジョージキリオン、第6号）、「アメリカ人の欧州観光激増 観光日本に光明」（第7・8合併号）、「米国内の日本観光熱激増」（第10・11合併号）などである。

毎号掲載されている「時評」「時論」は、「時評 外貨獲得に全力」（第5号）、「日本工藝の再建」（第6号）、「観光は国家の大事業である」（第7・8合併号）、「スキー季節を目前に控えて」（第9号）、「各地観光協会へ望むこと」（第10・11合併号）といったものである。

「外貨獲得に全力」は、吉田内閣の傾斜生産方式への再検討を提言、「輸出産業の振興が当面の脚光を浴びるに至」つたとし、さらに「外貨獲得事業たる観光事業の再建もまた大に優位性を主張して止まない」と結ばれている。

「観光は国家の大事業である」（第7・8合併号）は次ぎのように述べる。

貿易と併行して国民の生活水準を高めるものは観光事業である、文化国家としての日本に恵まれた唯一の天然資源を生ずことはとりもなおさず日本経済再建の捷徑であつて将また産業復興の動力なのである

(中略)

観光は国家の大事業であると共にまた民間の企業でなければならないのである、東洋のスイスと云える如くわが国は観光資源に恵まれている、しかも人口多くして国土狭少となつた今日われわれの進むべき道はこの観光にある、観光の観念は物見遊山ではない—新しい性格は産業の基盤であつてその資源開発は産業の振興と一離一体である。(『しなの観光民芸』第7・8合併号)

また、この時期、各地で発足していた観光協会についての提言でもある「各地観光協会へ望むこと」(第10・11合併号)は、「民間貿易再開を機にわが国内に於ける観光事業熱は高まり、これが観光会社の設立や旅行案内所、観光協会の設置となつて現れてきた」として次ぎのように述べる。

平和日本の将来に於いて如何に観光事業が大切なものであるかは、それをたゞ経済的な問題に就いてのみ考えたゞけでもうかがわれることでもあらう。その他文化の交流、民族の融和のためにも諸外国人の交流が必要なことは言うまでもないことである。吾々は平和日本としての第一着手事業としてあらゆる誘致策を構ずることによつて日本観光外客の獲得につとめなければならぬと思う。この点から考えて既に国内に観光地を中心として多数の観光協会が復活、もしくは誕生したことは、誠によろこばしいことである。

(『しなの観光民芸』第一〇・一一合併号、一九四七年一二月二一日)

しかし、「果して数多く出来た観光協会の活動が活発に展開されているだろうか?と云うことである。言いかえるならば、名ばかりつまり有名無実の観光協会は無いだらうか?」と問うて、「吾々は新しい多彩な観光事業を起す前に、一般人に対する観光知識の啓蒙とその認識を深めて貰う、地味な事業を忘れてはならないと思うのである」と指摘している。

まとめにかえて

長野県は「観光事業に一つの産業的な価値を与える必要を認め、全国にさきがけて二十二年七月一日、土木部に観光課を設置(中略)観光行政を一層強力に推進」していった(長野県編『県政十年のあゆみ』長野県、1957年、177頁、ただし『長野県政史』第三巻によれば県観光課の設置は栃木県について二番目)。それに先立つ1947年2月、県は観光事業懇談会を開催、戦時中から活動を停止していた長野県観光協会を解消して長野県観光連盟を結成することにし、47年6月にその発足をみた(『長野県政史』第三巻、172頁)。連盟は県庁内に事務局をおき、①文化・風光・産業の宣伝、②観光資源の開発・保護、③観光事業の調査研究、④観光関係の出版、⑤会員相互の連絡などを主要な事業とし、長野市観光協会・日本アルプス観光連盟(松本市)・上田市・諏訪市・飯田市観光協会・軽井沢観光協会・下諏訪観光協会・野尻湖観光協会・長野県乗合自動車組合・長野県旅館統制組合・長野県料芸組合など34団体が加盟した(同上)。

1947年という年は、3月に連合国軍最高司令官マッカーサーが記者会見において1年以内に早期

対日講和交渉が開始されると語って講和条約締結ムードがあふれ（実際にはさらに4年後に占領は終結する）、8月に民間貿易が再開された年である。県の観光行政体制もこの時期に整備されつつあった。紹介してきた3紙はいずれもこの1947年に創刊しており、この年は戦後観光史においても一つの重要な時期であったことがわかる。

しかし、この3紙を通してても、民間貿易再開にあわせて「国際観光」という観点からの観光論が目立つ。蚕糸業と国際観光という二本立てが戦後長野県経済の復興にとって重要な意義をもつといった議論もあり、この時期の3紙の観光論はなによりも外国からの観光客招致を主眼におき、「国際収支」改善という国家的目標に沿った線で展開していたといえよう。「国際観光都市」というアイデンティティはやがて浅間山演習地化反対運動でも表明されることになる（「在日米国軍山岳冬期戦学校演習地設置に関する件」1953・4・17軽井沢町議会議決、浅間山米軍演習地化反対期成同盟編集委員会編『二百万人の勝利 浅間山米軍演習地化反対運動史』長野県浅間山米軍演習地化反対期成同盟、1953年）。

しかし同時にレクリエーション論や、「勤労階級」とスキー、「百姓のため勤労者のため」の観光という観点が出ていることも注意しておきたい。現実にこの時期の旅行の多くは、「闇屋」など食糧事情をめぐる人々の移動といった性格が強いが、戦時期に展開していたツーリズムを受けてレクリエーション論や勤労者と旅行といった議論が出ていたものと思われる（高岡裕之前掲論文、高岡「15年戦争期の旅行と信州」長野県現代史研究会第21回例会報告・2002年6月8日）。今回の史料紹介は1947年までのものにかぎられているので、1948年以後の長野県内における観光論については他日を期したいと思う。全国的な動向もあわせた戦後長野県観光史の本格的な分析は課題とするほかはない。

1948年、長野県観光課は「県観光三ヶ年計画」を発表。中部山岳国立公園のほか国立公園昇格予定の三国山脈一帯（1949年9月「上信越高原国立公園」指定）、妙高・戸隠・美ヶ原・御岳・恵那山・天龍峡の六県立公園に加えて、野尻湖・志賀高原・松本（全国観光連盟指定観光都市）・長野（同）・上高地・諏訪湖・菅平・木崎湖・飯田・軽井沢など10ヶ所の「風景計画地」などの「観光地帯」保存をはかった。さらに①ホテルの充実による外国人観光客招致、②観光地主要道路整備、③ハイキングコース設定、④「風景計画地」に総合グラウンド・競馬場・水泳場・スキー場などの娯楽施設を充実、⑤青少年宿泊所設置、⑥美術館建設、を計画した（前掲『長野県政史』、172頁）。1949年は善光寺御開帳の年にあたり、あわせて復興経済を象徴するイベントとして早くもブームになりつつあった博覧会が開催された（長野平和博覧会、津金澤聰廣前掲論文）。県観光課調べによると1949年の観光客は743万人（平和博覧会は90万人）、翌年1950年には851万人と増加の一途をたどった（前掲『長野県政史』、174頁）。戦後観光史の第二のブームが訪れつつあった。